

Tell Me: みんなで話そう、私の一冊！ 絵本&児童書ブックトーク 2020 summer



国際英語専攻と史学専攻の学生有志 6 名



この夏、2年～4年までの絵本&児童書ファンでブックトークをしました。今後も続きそうな予感📖
自分も加わってみたいという方、遠慮なくご一報を！（企画・助言：国際英語学科 田中美保子）

第一回 8月28日 何かをつくりたくなる本(3冊)

📖「ネズミの冒険」シリーズ

トーベン・クールマン作、金原瑞人訳 ブロンズ新社 2015年～

📖『はらぺこあおむし』エリック・カール作・画、もりひさし訳 偕成社 1976年

📖『モモ』ミヒヤエル・エンデ作、大島かおり訳 岩波書店 1976年

第二回 8月31日 声援をおくりたくなる本(4冊)

📖『からすのパンやさん』かこさとし作・画 偕成社 1973年

📖『こんとあき』林明子作・画 福音館書店 1989年

📖『冒険者たち ガンバと15ひきの仲間』斎藤惇夫作 牧書店 1972年

📖「トビー・ロールネス」シリーズ

ティモテ・ド・フォンベル作、伏見操訳 岩崎書店 2008～2009年

第三回 9月2日 自分に挑戦したくなる本(3冊)

📖『川べのちいさなモグラ紳士』

フィリパ・ピアス作、猪熊葉子訳 岩波書店 2005年

📖『ユゴーの不思議な発明』

ブライアン・セルズニック作・画、金原瑞人訳 アスペクト 2008年

📖『クローディアの秘密』

E・L・カニグズバーグ作、松永ふみ子訳 岩波書店 1969年



何かをつくりたくなる本

📖「ネズミの冒険」シリーズ トーベン・クールマン作・画、金原瑞人訳 ブロンズ新社 2015 年～

私が紹介する本は、トーベン・クールマンの「ネズミの冒険」シリーズです。このシリーズは 1 作目出版が 2014 年と比較的最近の絵本です。おそらく皆さんはもう中学生ぐらいになっていて、絵本なんて読まなくなっているころだと思います。人によっては、新しい絵本を読むなんてことは、しばらくしていない人もいるのではないのでしょうか。そんな人に、物語としても面白く、科学や発明、その歴史と偉人を一緒に学ぶことが出来る、かわいくも勇敢なネズミの冒険の話を紹介したいと思います。

まずはこの絵本について少し。作者はトーベン・クールマンというドイツの絵本作家です。彼はハンブルグ応用科学大学でイラストレーションとコミュニケーション・デザインを学び、卒業制作として書き下ろしたものが、1 作目の『リンドバーク』です。彼の幼い頃からの歴史的な発明や科学の発達と絵への興味がこのシリーズを生み出しました。この絵本は、歴代の偉人の名を冠した題名がつけられていて、小さなネズミが主人公になって冒険に挑み、その偉人を紹介していく物語です。1 作目は、大西洋単独飛行に成功した飛行家・リンドバーク。2 作目は、人類で初めて月面に降り立った宇宙飛行士・アームストロング。3 作目は、発明王・エジソン。みんな一度は聞いたことがある名前だと思います。

早速、1 作目の『リンドバーク』の冒頭を紹介します。

ネズミの物語。／なん年もまえのこと、大きな港町に、知りたがりやのネズミがいた。この子ネズミは、何か月も薄暗い図書館に通っては、こっそり人間の書いた本を読みふけていた。／なかまがいない。／ある日、子ネズミが図書館から家に帰ってみると、あたりがしんとしていた。静かすぎて、きみが悪いくらいだ。この町には、何百匹きもの仲間がいた。ところが、だれもいなくなってしまった。／なかまのネズミがいなくなった原因は新しいねずみとりだ。人間でもネズミでも、歓迎してくれるらしいアメリカへと逃げたんだろう。でもどうやって？港にはねこがいて潜り込めない。／そこで、こうもりを真似して、空を飛んでいくことにした。試行錯誤を繰り返して、テストして、最後には成功させた。／長い空の旅を終えて、ニューヨークにつくと、空飛ぶなかまのニュースを聞きつけた仲間のネズミたちが出迎えてくれた。



2 作目の『アームストロング』は、月はチーズだと思っているネズミたちの中で、月に興味を持ち、研究を始めた 1 匹のネズミがいた。誰も研究結果を信じてくれなかったが、唯一信じてくれたあるお爺さんネズミに励まされ、宇宙船を作って、月へ行って帰ってくるというお話です。3 作目の『エジソン』は、先祖が残した手紙をもとに、宝を探しに海底まで行く話だ。今回も潜水艇や潜水服を作って、潜りに行く。金銀財宝は確かに見つかったけれども、実は手紙に書かれていた宝はもっと別のものだったようで、なんとある偉大な発明に関するものだった、というお話です。



この絵本の見どころの一つはやはり緻密に描かれたイラストです。ネズミをはじめとした生き物も背景もネズミが作っている飛行機や宇宙船、果ては設計図まで、説得力のあるリアルさで描かれています。そして、小さな小さなネズミが自分の望みを叶えるために、飛行機や宇宙船、潜水艦を設計図から書き出して、部品をかき集め、何日も何週間も試行錯誤を繰り返している姿は一緒にあって応援したくなり、勇気ももらえます。

物語が終わった後には、作中でネズミがつくったものの歴史と偉人について、画と一緒に紹介しています。こうやって読むと、発明ってすごい、自分もなにか作ってみたい、冒険したいと思わされます。10月には『アインシュタイン』(Einstein: The Fantastical Journey of a Mouse Through Time and Space)が4作目として出版されるそうです。空を飛び、宇宙に行き、深海にまで潜りました。次のネズミはどんな素晴らしい冒険をしてくれるのか、楽しみだとは思いませんか。(中村優美菜)



📖『はらぺこあおむし』エリック・カール作・画、もりひさし訳 偕成社 1976年

私が皆さんにご紹介したいのは絵本として有名な「はらぺこあおむし」です。誰もが知っている名作を紹介するのは少し平凡な気もしますが、この絵本を選択したのは大人になった現在、原作との比較がとても面白い作品だと感じたからです。また、この「はらぺこあおむし」という作品は易しい英語で書かれているので原作も手軽に読みやすく、日本語に翻訳されて愛されている多くの傑作の原作を読むきっかけにもなる本だと思います。そこで今回は、日本語版と英語版の比較をしながら「はらぺこあおむし」の面白さを皆さんとぜひシェアさせていただきたいと思います。

図書館では

『ポップアップはらぺこあおむし』

(請求記号: 909.3/2009

資料番号: 0371715)

を所蔵しています！

まずは本の基本情報です。この本の原作はアメリカのエリック・カールによって書かれ、日本では森比左志が翻訳しました。1969年に初版が刊行されたのですが、このベストセラー絵本の出版に日本が大きく貢献したことをご存じでしょうか。『はらぺこあおむし』といえば、鮮やかなイラストとページに施された仕掛けが魅力のひとつですが、当時のアメリカではコストがかかりすぎて出版できなかったそうです。そこで編集者が来日した時に日本の出版社に相談し、彼らの協力を得てようやく世に送り出されました。次はあらすじと要所の魅力を原作と比較して見てみます。

物語は、ある月夜の晩にお月様が葉っぱの上にある小さな卵を見つめるシーンから始まります。暖かい月曜日の朝に 元気に誕生したちいさなアオムシは、一週間かけて様々なご飯を食べて成長していきます。そして体が大きくなったアオムシはサナギへと変化し、立派な蝶になる、というストーリーです。この明るい雰囲気伝えるのは、リズムカルな言葉選びです。例えば、生まれたばかりのアオムシが一週間食べ物を食べてもまだまだお腹が空いているシーンでは、接続詞を変えながら「おなかっぱっこぺこ」という表現を繰り返し使用しておりテンポよくページを進めることができます。原作でも食べ物の名前以外の言葉選びを全て同じにしておき、ここでもリズムを重

視していることが読み取れます。しかしこの箇所では、細切れのページに載せられている言葉の位置が二つの版で異なっています。原作の英語版では同じ still が使われていますが、日本語訳では、まだ、やっぱり、それでも、と違う言葉が充てられているのです。こういう違いも面白いのでぜひ比べてみてください。

違いはもう一つあります。原作ではアオムシに起こる出来事を第三者目線から客観的に描いているのに対し、日本語版では、感想やセリフ口調を交えながら描いています。読者に語り掛けたり尋ねたりしながら物語を展開させていくアレンジが加えられており、私はその工夫にも心をつかまれました。それらのアレンジがどこにあったかは、、皆さんご自身で見つけてみてくださいね。

加えて、この本のエンディングには「おしまい」や「おわり」といった言葉がありません。もちろん、原作にもないのです。私はこの心遣いがとても好きです。アオムシは蝶になりましたが、彼が輝くのはむしろ蝶になって空を自由に飛び回るようになってからだと思います。絵本の中であっても彼の生き方を終わらせない工夫が、この絵本の魅力を引き立たせてくれているなと感じました。

今回は、誰もが知る名作の一つ「はらぺこあおむし」をシェアさせていただきました。翻訳者の個性溢れる訳も素敵ですが、やはり原作を読んでもまた違った楽しみを発見できます。この本を通して、ぜひ皆さんも卓上の海外旅行を試みてはいかがでしょうか？

(鈴木緋晏)



📖『モモ』ミヒヤエル・エンデ作、大島かおり訳
岩波書店 1976 年

図書館では

『モモ』

(請求記号:909/E4/C.2

登録番号:9044791)

を所蔵しています！

作者のエンデは西ドイツの児童文学作家で、ミュンヘンの演劇学校を出て俳優として活躍したのち子どものための文学を数多く執筆しました。今回紹介する『モモ』の他に、『ジム=ボタンの冒険』や『果てしない物語』などが代表作です。

さて、『モモ』は古代の人々に親しまれていた円形劇場の跡地に謎の女の子モモが住みつくところから始まります。街の人たちと楽しく

暮らすモモには、人の話に耳を傾けるという当たり前のようでとても珍しい才能がありました。「モモのところにいってごらん!」と街の人々は声を掛け合うようになります。しかし灰色の

男たちと呼ばれる時間泥棒がモモの住む街に現れて、モモやその友達に暗い影を落とすのです。

ある日、灰色の男たちが時間を奪うために街の床屋のフージー氏の元に現れます。すると、その後、灰色の男たちの計画通りにフージー氏は出来るだけ無駄なく、出来るだけ急いで生活するようになり、同様の変化がいつしか街全体を覆ってしまいます。しかしモモには効果がなくどころか灰色の男たちの企みを暴き、それが敵視されて、灰色の男たちから身を隠さなくてはならなくなりました。そこで出会ったのが、<どこにもない家>で人々の時間を司って時間を配分しているマイスター・ホラという人物です。

以下は、私がこの作品の中で一番好きな、マイスター・ホラとモモの場面です。

マイスター・ホラはモモに時間について教えます。

「(略)光を見るためには目があり、音を聞くためには耳があるのとおなじに、人間には時間を感じ取るために心というものがある。そして、もしその心が時間を感じ取らないような時には、その時間は無いも同じだ」

「(略)人間はじぶんの時間をどうするかは、じぶんじしんできめなくてはならないからだよ。だから時間をぬすまれないようにすることだってじぶんでやらなくてはいけない」

マイスター・ホラはこうモモに諭すのです。この部分を読むたびに、私は自分の時間を大事に使えているかな、と背筋が伸びる思いです。「自分の時間」をつくることを心掛けて生きようと思わせてくれる本なので今回の「何かをつくりたくなる本」として紹介しようと思いました。出会ってから何年経っても私にとって大切な本の中のひとつです。

『モモ』は灰色の男たちの謎に迫る推理小説のようなスリルと、時間を奪うという現代社会への風刺に加えて、人間一人一人が持っている自分だけの時間を象徴する時間の花というファンタジー要素と、さまざまな文学の要素がたっぷり詰まった作品です。時間の花の美しい描写、灰色の男たちの恐ろしさ、モモと時間泥棒との対決の他、モモの親友ジジの語る物語もとても素敵で、実際に読んで欲しいということしか言えません!(笑)

それほど沢山の魅力がある本だということは自信を持って言えます。

アルバイトや学業、自分の楽しみのための時間など、大学生になって一気に忙しくなったなと感じる人に、勿論そうでない人にも、ミヒャエル・エンデの『モモ』を読んで、自分だけがもつ自分の時間の尊さについて改めて考えてみて欲しいなと思います。(五十嵐彩夏)





声援をおくりたくなる本

📖『からすのパンやさん』かこさとし作・画 偕成社 1973 年

テーマが【声援をおくりたくなる本】なので、私は『からすのパンやさん』を紹介したいと思います。

皆さん、この絵本を知っていますか？この絵本は、カラスがパンを作るという現実ではありえないお話を絵本にしています。しかし、ふだん、私達が目にするのとは対照的な描かれ方をしているカラスの姿にカワイイ!と思わず言いたくなる作品です。私は、小さい頃寝る前に必ず読んでもらっていました。作者は、東大の理系出身でありながら、児童文学研究者でもあるかこさとしです。私が今回紹介する『からすのぱんやさん』以外にからすの～シリーズがたくさんあります。また有名な『だるまちゃんどてんぐちゃん』でよく知られている「だるまちゃん」シリーズなど、約 500 点以上の作品を手がけた絵本作家でもあります。

知っている方もいらっしゃると思いますが、ざっくりあらすじを紹介します。ある森にからすの町があり、からすのパンやさんのお店がありました。そのお家に全員体の色が違う 4 羽の赤ちゃんが生まれました。からすのお父さんもお母さんも 4 羽を大事に育てていました。しかしながら、お父さんは、赤ちゃんが泣きだすと飛んで行ってあやしたり抱いたりするもんですから、パンを焦がしたり、半焼きパンにしてしまったりしていました。また、お母さんも同じように赤ちゃんが泣きだすと飛んで行ってあやしたり抱いたりするもんですから、お店の掃除ができなくなり、お店がちらかったままになっていました。こんな日が続き、段々お店にくるお客さんは減っていききました。しかし、大きくなった 4 羽の赤ちゃんが売れない余ったパンをおやつに食べていると、お友達が欲しいといひます。そこで、家族みんなでパンを焼くことになりました。おいしいパンができあがり、大勢のこどもたちがパン屋にやってきました。子どもたちたちから、お店がもっときれいだったらいいな、とかもっと色々な種類のパンが食べたいななどの要望がありました。そこで、お店をきれいに掃除し、とっても素敵に変った形のおいしいパンをたくさん作りました。香ばしい匂いが森中に広がり、あっという間にたくさんのかからすがパン屋さんに飛んできます。こうして、からすのパン屋さんはからすの町で評判のお店になりました。というお話です。

私がこの作品を紹介した一番の理由は、現実と想像のギャップが面白いからです。現実の世界のカラスのイメージは、ごみを漁っていたりなど汚いイメージがありますよね。しかし、この絵本では、人間のような暮らしをカラスがしていて、パンまで作ってしまいます。また、カラスたちはきちんと服もきています。幼いころから、そういうところに面白さを感じ、大人になった今でもたまに読みたくなってしまう本です。

もう一つの理由は、存続の危機に瀕していたパン屋さんが工夫を凝らして人気のパン屋さんになっていきますよね。例えば、売れるためにどんなパンを作ろうかと色々なパンを作ったページがあります。ここで私はいつも自分だったらこんなパン作るのに、とか、こんなパンがあったら面白いな、と

か、これはちょっと食べにくいんじゃないのかな、というようにまるで自分もそこにいるような気分になり、パン屋が大成功した時は大喜びしていました。

売れないパン屋さんが一家で奮闘し、有名なパン屋さんになっていく様子には、思わず声援を送りたくありませんか。ということで、『からすのぱんやさん』を紹介させていただきました。

最後になりますが、おとなになって、小さい頃によんでいた絵本を読み返すと違った視点で読めるので新しい発見があるのではないかと思います。皆さん、この機会に自分が好きだった絵本を読み返してみたいかがでしょうか。（炭遥子）



📖『こんとあき』林明子作・画 福音館書店 1989 年

・林明子の紹介：まずこの絵本を書いた林明子について紹介します。林明子は『はじめてのおつかい』をはじめとする作品をたくさん手掛けている絵本作家です。誰もが小さいときに一度は読んだことがあるのではないのでしょうか。どの作品も子供の生き生きとした表情を鮮明に描いていて幅広い世代から長い間愛されてきました。2017年には原画展も開かれ、数々のグッズも発売されています。そういう林明子の絵本の名から今回紹介するのは初期の作品で、1989年に出版された『こんとあき』です。余談になりますが私がこの本を初めて読んだのは幼稚園の年長のときです。教育実習で来ていた先生が読んでくださったことをきっかけに図書館に何度も借りに行きました。その年のクリスマスにサンタさんにもらった思い出のある本です。私の今日の話を聞いて少しでも興味をもっていただけたら嬉しいです。

図書館では

『こんとあき』

(請求記号：909.1/g9)

登録番号：0408931)

を所蔵しています！

・あらすじ：読んだことある方もいるかと思いますが、改めてあらすじを紹介します。この絵本の主な登場人物はキツネのぬいぐるみのコンと女の子のあき、あきのおばあちゃんです。「コンは赤ちゃんを待っていました。」という文章からこの絵本ははじまります。コンはあきが生まれたところからずっと一緒にいます。あきが成長するにつれてコンは古びてきたり腕がほころびてしまいました。そこで、あきはコンを治してもらうために一緒におばあちゃんの家に出かけていきます。あきはコンと電車の中ではぐれたり、コンが犬に連れ去られてしまったり、様々な大変な目にあいます。どんなことが起こってもコンは「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と繰り返します。最終的に二人は困難を乗り越えて無事におばあちゃんの家にとどり着くことが出来ます。一生懸命頑張る二人の姿に思わずハラハラしながらも声援を送りたくなる絵本です。

・紹介したい魅力：まず一つめは林明子さんの描く美しい絵です。色使いが鮮やかで人々の表情がリアルに描かれています。特にこの絵本ではキツネのぬいぐるみであるコンのしっぽのふわふわ

とした質感が見事です。また、あきが電車の中でお弁当を買いに行ったこんを待つ場面があります。あきは電車の窓にほっぺをくっつけて待っているのですが、不安な感情が表情に表れていてとても印象的でした。実は絵本に出てくる子供たちは林明子さんの甥っ子や姪っ子がモデルになっているそうです。実際に絵を描く際には子供たちにポーズをとってもらったこともあるようです。二つ目は絵本のところどころに隠れキャラクターがいる、遊び心にあふれているところです。特に表紙にはたくさんの隠れキャラクターがいます。少し小さくて見えにくいのですがチャップリンらしき男性や不思議の国のアリスに似た女の子が立っています。他にも林明子自身の他の絵本の登場人物がいたところに書かれています。どこにキャラクターが隠れているのか探しながら読んでみるのも一味違う楽しみ方が出来ます。

このように遊び心がある絵本なのですが、実は他にも面白い仕掛けがあります。本を開くと1ページ目に様々な形が描かれています。実はこれはぬいぐるみのこんの型紙になっています。福音館書店のホームページにはこんの作り方が紹介されているので実際にこんを作ることが出来るのです。絵本の中のぬいぐるみを実際に作ることが出来るのはとっても楽しい仕掛けだと思いました。ほかに面白い点として、もう一度表紙を見てみます。表紙を見てみるとこんとあきのすぐ後ろにやさしく微笑む老夫婦が描かれています。この二人は林さんが自分の両親をモデルにしたとのこと。このようにちょっとした秘密が隠されていることもこの絵本の魅力の一つだと思います。

・まとめ：『こんとあき』について紹介してきましたが、いかがだったでしょうか。子どものときに読んでももちろん楽しい素敵なお話です。ですが少し大人になった今、ストーリーだけではなく絵に注目してみたり、隠れたキャラクターを探しながら読んでみるとまた違った面白さが感じられるのではないかと思います。是非読んだことある方もない方もこの機会にこんとあきを手に取ってみてください。(松岡咲良)



📖『冒険者たち ガンバと15匹の仲間』斎藤惇夫作 牧書店 1972年

図書館では

『冒険者たち：ガンバと
十五匹の仲間』

(請求記号：909/S22-2

登録番号：0066335)

を所蔵しています！

私は、『冒険者たち—ガンバと15匹の仲間』を紹介したいと思います。作者の斎藤惇夫は新潟県出身の児童文学作家で、他にも『グリックの冒険』『ガンバとカワウソの冒険』『哲夫の春休み』などの作品を書いています。

台所の床下にある貯蔵穴に住む町ネズミのガンバは、ある日友だちのマンプクに誘われて、港で開かれる船乗りネズミたちの集会に出かけます。そこでベテラン船乗りネズミのヨイショ、物知りのガクシャ、賭けに使うサイコロをいつも持ち歩いているイカサマなど沢山の船乗りネズミたちや港ネズミたちと知り合って楽しい夜を過ごします。しかし集会がお開きになろうという夜更け、夢見が島に住む忠太というネズミが、助けを求めて大雨の中を息も絶え絶えになってやってくるのです……。恐ろしいイタチのノロイ一族から忠太の島の仲間を救うため、ガンバ、マンプク、ガクシャ、ヨイショ、カリック、イカサマ、テノ

ール、バス、バレット、イダテン、シジン、アナホリ、ジャンプ、オイボレ、ボーボの 15 人が忠太と共に冒険の旅に出発しました。名前からも分かる通り、個性豊かな仲間達です。

大半が船乗りネズミで構成されるメンバーの中、集会で啖呵を切った町ネズミのガンバがリーダーを努めます。この夢見が島での冒険を経て、生意気で向こう見ずなところがあったガンバがどんどん頼もしく、リーダーらしくなっていく姿も見どころです。以下に引用するのは、ネズミたちが初めてイタチと相まみえた場面です。

「だから最初からつまらねえことをいうなってんだよ。じゃあ誰がやるってんだ、こんな時につて！」イカサマが高倉ネズミたちをにらみつけながらいいました。しかし、誰も自分がやると言い出すネズミはいませんでした。「やはりおれがやる。」ガンバが静かな、しかしきっぱりとした声でいいました。「今さらあわててもしかたがない。くるべきものはきた。おれたちは今から戦う。どう戦いが展開されるにしろ、おれのいうとおりに動いてくれ。不服だったら今のうちだ、いっておいでくれ。」誰も口を出しません。

『冒険者たち』は全部で 3 部に別れていて、第 1 部はガンバとマンブクが集会に出かけてから島に向かうまで、第 2 部は上陸してから島のネズミたちと合流し拠点を築くまで、最後の第 3 部では、岩山と海岸で繰り広げられる、ネズミたちとノロイー族との対決が描かれます。私が特に好きなのは第 3 章です。ノロイー族は普通のイタチと違ってとても狡猾で残忍です。そのため、ガンバたちの拠点から自分たちのいる砂浜まで誘うために、歌や踊りや食べ物などの様々な手を使って来るのですが、ガンバと仲間たちはこれに、自分たちの個性を活かしながら戦います。「イタチとの戦い 第 3 夜」の章から、イタチたちの踊りに誘われてしまうネズミたちのシーンを引用します。

イタチたちが踊っている岩との間には、大きな岩が、あと 4 つあるきりです。このままネズミたちが進んでいけば……。踊りながら進んでいくネズミたちの先頭が、まさに第 2 の岩を登ろうと手をかけた時です。とつぜんものすごいスピードで岩山の入り口からかけおりてきて一匹のネズミが、最初に第 2 の岩にかけあがりました。そして、イタチの方を向きながら踊り始めました。ちょうどイタチと同じ踊り方で。いや、イタチと逆の踊り方で。「バレットだ！」ガンバがそっとつぶやきました。まさにそれは、あの上屋の中でガンバとマンブクを相手に踊りまくったバレットでした。バレットは、もはや、仲間に自分のステップの速さを誇示するためでも、バレーの大会で優勝するためでもなく、イタチの踊りを打ち破るために真剣になって踊っています。上屋で見た、どこかユーモラスな、余裕のある踊り方ではなく、指の先から足の先まで緊張させ踊り続けています。1 匹対 67 匹。イタチはバレットを広く円形にかこむようにして少しの乱れも見せないで踊っています。

……張り詰めた緊張感が伝わるこの場面を読むと、いつでも胸がいっぱいになります。

引用した踊りの対決の夜だけでなく、15 匹もの仲間と島のネズミたちが時に自分の得意分野で、時に力を合わせてイタチに立ち向かっていく姿にはこちらまで手に汗を握ってしまいそうです。「がんばれ！」と声をかけたくなるので今回の「声援を送りたくなる本」として紹介しました。このブックトークに参加するにあたって、小学生の時以来久しぶりにこの本を読み返したのですが、こんなに面白い話だった？と思うほど夢中になって一気に読んでしまいました。少し長い本ですが、時間のあたる夏休みに読むにはぴったりの作品だと思います。（五十嵐彩夏）





📖「トビー・ロールネス」シリーズ ティモテ・ド・フォンベル作、伏見操訳 岩崎書店 2008 年～2009 年

私が紹介する本は、ティモテ・ド・フォンベルの『トビー・ロールネス』シリーズです。全 4 巻のファンタジーです。作者のティモテ・ド・フォンベルは、フランスの作家で、フランスとベトナムで文学の教師をつとめていました。のちに演劇に転向し、自らが脚本と演出を手掛ける劇団を結成して、以降、脚本を書き続けます。今回紹介する『トビー・ロールネス』は彼の初めての小説で、サン・テグジュペリ賞などを受賞しています。

この物語は、ある大きな木で起きたことについてのお話です。物語の中心となるのは、人間と同じ姿かたちですが、身長が 1.5～2mm ほどしかない小さな小さな生き物です。たぶん、たいていの小人といわれるものよりもさらに小さい存在です。そんな人々が木のいたるところに住んでいるわけです。主人公はトビー・ロールネス。彼は好奇心旺盛な元気な男の子です。そして、木の世界で一番優れた学者である父シム・ロールネスと大富豪の一人娘である母マイアの 3 人で幸せに暮らしていました。しかし、ある日父のシムが木の世界を大きく変える発明をしたことから、その暮らしは一変します。日の光がよく届く上枝から暗くじめじめしがちな下枝へと逃げていきます。しばらく何年かは下枝でそれなりに楽しく暮らしていましたが、シムの研究をわがものにしたい奴らが、下枝までやってきたのです。どうしても研究を渡したくないシムを母もろとも投獄し、トビーは何千人もの狩人に追われる身となってしまいます。

話はトビーがその何千人もの狩人から逃れているシーンから始まります。冒頭を少し読んでみます。

トビー・ロールネスは身長 1.5 ミリ。13 歳にしては小さいほうだ。足の先だけがわずかに木の皮のくぼみからはみ出している。トビーは身をかたくしたまま、動かない。闇がひたひたと水のように彼を包む。トビーがいるのは木の皮のくぼみの中だ。あしは傷だらけで、肩はぱっくりと裂け、髪には血がこびりついている。小さな手は茨に引き裂かれ、痛みと疲れで体中の感覚がなくなっていた。トビーは世界中を敵にまわし、自分の仲間から追われているのだ。その時、それまでのどんな痛みや恐ろしさより、はるかにつらく、信じられないものが耳に飛び込んできた。それは大好きな親友、レオ・ブルーの声だった。トビーとレオは、「トビレオ」と、ひとつの名前で呼ばれるくらい、いつもいっしょだった。しかし今夜、トビーがかくれている穴のすぐ横で、たいまつをふりまわしているのが同じレオだとは、とうてい信じられなかった。親友がこう叫ぶ声を聞くと、トビーは胸が引き裂かれてしまいそうだった。「かならず捕まえてやるからな！待ってろよ、トビー！」レオのさけびは枝の間にこだました。

序盤から緊迫したシーンですが、間間に以前の幸せな記憶を思い出す描写があります。小さい頃から仲のよかったレオとの記憶。両親との幸せな日常、下枝であった大好きなエリーシャ。しかし現実には甘くはなく、狩人に追われ、裏切りにあい、木の悲惨な状態を目の当たりにしながら、両親をたすけるためにトビーは一人四苦八苦します。



この物語は、いろいろな面で楽しみ、考えさせられる本です。トビー本人の話はもちろん、木からの樹液の搾取による環境破壊、人々や木にとっての害虫、違う種族や権力に従わないものの奴隷化など、私たちの社会の縮図を見ているような気分になります。

身長は小さいですが、等身大のトビーは読んでいると共感できるところがたくさんあります。今回紹介したシーンから壮大に話が膨らんでいきます。私の読んできた児童書でも一押しの本です。ぜひぜひ読んでみてください。(中村優美菜)



自分に挑戦したくなる本

📖『川べのちいさなモグラ紳士』

フィリパ・ピアス作、猪熊葉子訳 岩波書店 2005 年

私が紹介したい本は、フィリパ・ピアスの『川べのちいさなモグラ紳士』です。ピアスは、イギリスを代表する児童文学作家で、1958年に発表された彼女の代表作『トムは真夜中の庭で』は、イギリスの児童文学の金字塔と呼ばれています。今回紹介する本はピアスが晩年に書き上げた作品です。これは魔法にかかってしまったモグラと一人の少女が登場する物語で、動物と人間の不思議な交流を描いている作品です。魔法の力によって会話ができるようになったモグラは、これまた魔法によって不死身の体を手に入れます。人間世界で起こる闘争などに巻き込まれながら、数百年という長い月日を生きてきた不思議な存在なのです。モグラはベットという名前の少女と出会い、少しずつ心を通わせていきます。物語の最後には、ベットの協力もあり、モグラは魔法から無事解放されます。

図書館では

『川べのちいさなモグラ紳士』

(請求記号：909.33/2005

登録番号：0318645)

を所蔵しています！

あらすじを聞くだけだと「現実離れしたストーリーなんだな」とか「ファンタジーを好む子どもが読む本だな」と思われるかもしれませんが、これは決して現実離れした子どもだましの本ではないのです。いたるところに現実の世界にも通じる要素がちりばめられているので、読者が共感できる部分は少なくありません。祖父母とともに暮らしてゐるベットは、やがて幼い頃に別れた実のお母さんと再会し、一緒に暮らしはじめることになります。長い間会っていない母親と再会することに対して、ベットがとても大きな不安を感じているということがわかる描写が、作品の中にはいくつか出てきます。こういう部分を読むと、実際に現代の社会において家庭環境に問題を抱える子どもの持つ「心の闇」とリンクする部分があると感じさせられます。

また物語の最後では、新しい環境での生活に溶け込んでいくベットの様子が丁寧に描かれます。読者に「新たな一步を踏み出す勇気」を見事に与えているのではないかと思います。初めは不安しか感じていなかったベットが、なぜ新しい環境に飛び込めたのか。それは、モグラとの出会いがあったからだと思ひます。モグラとの出会いによってベットが得たものはすごく大きなものでした。さらにこの本を読むと、「子ども」とはどういう存在なのか深く考えさせられるんです。私は、モグラの壮絶な体験を聞

いてあまりの衝撃に眠れなくなってしまうベットの姿がとても印象に残りました。おとななら「そんなのありえないよ」と言うようなことでも信じてることができるベットの素直さも印象的です。「ベットは人間だったがーモグラという別種の生き物がどんな風を感じるものなのかを、少しわかったような気がした。」という文があります。自分とは違う生き物の気持ちを想像して、共感することができるベットに、初めて読んだときはとても驚きました。私たちが今急にモグラの気持ちを理解しろと言われても難しいですよ。でもこれほど豊かな想像力を持っているということが「子ども」の強みである、そう思い知らされました。このような感受性の強さや豊かな想像力は、ベットだけではなく、現実世界の子どもたちみんなが持ち合わせているものだと感じます。私たちは大きくなるにつれ、それらを忘れてしまうのかもしれない。

魔法から解き放たれたいというモグラの望みを知ったベットは、モグラの魔法を解いてあげようとして。しかしそれはモグラが永遠の命を終えるということ、つまりモグラとベットの「別れ」を意味することになります。モグラとの別れに大きな寂しさを感じるベットでしたが、モグラの幸せを一番に考えようとして。そんなベットのまっすぐな思いが通じ、ついに最後はモグラにかかった魔法を解くことに成功します。子供向けの物語には、いつまでも 2 人は仲良く暮らしました、といったハッピーエンドが定番ですよ。でもこの本はそうではありません。みなさんご存知の通り、現実では出会いに別れはつきものです。子どもが読むものにも関わらず、わりと現実的なエンディングになっているというところもこの本の好きなのところです。モグラが魔法が使える、という現実ではありえない設定が目立ちがちですが、そんな現実離れした設定の奥にある「真実」こそがこの作品の魅力であると思います。モグラとの出会いによってベットが新たな環境に飛び込めたように、大切な存在との出会いが自分を大きく変えてくれる。これを読めばきっとそう思えるはずですよ。みなさんもぜひ読んでみてはいかがでしょうか？



(坂田ななみ)



📖『ユゴーの不思議な発明』

ブライアン・セルズニック作、金原瑞人訳 アスペクト 2008 年

私が紹介する本は、ブライアン・セルズニックの『ユゴーの不思議な発明』です。2007 年に出版され、2012 年にはマーティン・スコセッシ監督によって映画化もされている小説です。映画を知っている人もいないのではないのでしょうか。

ブライアン・セルズニックはアメリカのイラストレーター、作家です。児童書のイラストを多く描いており、『ハリー・ポッター』シリーズの 20 周年記念では、アメリカ版で表紙のイラストも手掛けています。今回紹介する『ユゴーの不思議な発明』は彼の長年の夢である、ジョルジュ・メリエスについての物語を書きたいという想いが、形になったものです。ジョルジュ・メリエスとは、フランスの映画製作者で、映画の創成期において様々な技術を開発した人でもあり、「世界初の職業映画監督」と言われています。SFX (特撮のこと) の創始者でもあり、手で色付けしたカラー映画も作っています。彼の映画で最も有名なものは、1902 年の『月世界旅行』です。この絵は見たことがあるという人もいないのではないのでしょうか。彼と彼のからくり人形のコレクションの話を基にこの物語は作られています。

この本の一番の見どころは 158 枚ものイラストで物語が構成されていることです。映画のフィルムのコマを並べたような絵が続き、数行の文章が出てきたかと思うと、また絵が出てきて、今度は文章が数ページ続いたりします。この絵と文章のリズムの楽しさと、ストーリーの展開がとても面白い作品になっています。

ページを開くと 1 頁目から早速、鉛筆画があらわれます。21 枚の画のあとようやく文章がはじまります。次はその文章の書かれている最初の 1 頁目です。

時計の後ろからは、下がよく見える。ユゴーはそわそわしながらポケットの中の小さなノートをさすり、あわてるな、落ち着けと自分にいいかせた。/ 駅構内の小さなおもちゃ屋の老人が、女の子と言い争っている。少女の年はユゴーと同じくらいだ。その子が小脇に本を抱え、カウンターの奥へ姿を消すのを、何度も見かけたことがある。/ 今日の老人はとびきり機嫌が悪そうだ。売り物のおもちゃがいくつかなくなっているのに気づいたのだろうか？ ま、だからといって盗みがやめられるわけじゃない。/ ユゴーにはそのおもちゃが必要だった。/ 老人と少女の言い合いはしばらくつづき、やがて少女は本を閉じて、走り去った。

舞台は 1930 年代のパリです。主人公はパリ駅の秘密の部屋に隠れ住む 12 歳の孤児ユゴー・カブレ。パリ駅にあるたくさんの時計のねじを巻く仕事をしながら、食べ物や玩具屋の玩具を盗んで、暮らしています。彼は父が残したこわれたからくり人形とその修復の手がかりとなるノートを中心に、玩具屋の老人の家に住む女の子イザベルと一緒に、からくり人形と老人の謎に迫っていきます。

ユゴーやイザベル、そして老人、それぞれが自分の過去に向き合い、成長し、乗り越えていく。そして、互いの未来が次第に交差してゆく様はときどきします。自分の手で何かを生み出したり、謎を解き明かしていった、自分に自信をつけていくユゴーの物語はとても感動するものでもあります。

映画もありますが、この物語は本で読んでこそその作品だと思います。文庫本も出ていて、読むのにも時間はあまりかかりません。ジョルジュ・メリエスの映画と共に読んでみるというのもいいかもしれません。(中村優美菜)



📖『クロードの秘密』E・L・カニグズバーグ作、松永ふみ子訳
岩波書店 1969 年

図書館では

『クロードの秘密』

(請求記号：909/K15-2

登録番号：0065993)

を所蔵しています！

私からは E・L・カニグズバーグの『クロードの秘密』を紹介したいと思います。作者の E・L・カニグズバーグはアメリカの児童文学作家で、1968 年の『クロードの秘密』と 1997 年の『ティーパーティーの謎』で 2 度、ニューベリー賞という輝かしい賞を受賞しています。

クロードは、長女としての待遇や同じことの繰り返しの毎日に飽き飽きしています。そんな彼女が、大胆かつお金に関してはケチな弟のジェイミーを誘って家出を計画するところから物語が始まります。クロードが家出先に選んだのは毎日沢山の来館者であふれるニューヨークのメトロポリタン美術館でした。2人は職員に見つからないように気を付けて、美術品に囲まれながら眠りにつきます。以下は2人が美術館で過ごす初めての夜の様子です。

ベルは、あと5分で閉館という知らせです。そこでふたりは洗面所の仕切りの中にはいりました。仕切りの中で、2人は5時半まで待ちました。もう、ひとりのこらず帰ったことがたしかになりました。それからふたりは出てきて一緒になりました。冬の5時半は暗いのですが、メトロポリタン美術館ほど暗いところもあります。天井がとても高く、そこに暗闇がいっぱい詰まっています。ジェイミーとクロードは、廊下を何キロメートルも歩いたような気がしました。さいわい、廊下は幅がひろいので、ふたりは、ものにつまずかずにすみました。

閉館後の美術館の静けさがひしひしと感じられて、読んでいるこちらも息を潜めてしまいます。

美術館での暮らしに慣れたころ、メトロポリタン美術館に新しい展示品がやってきます。天使とよばれるこの大理石像はルネサンスの巨匠ミケランジェロのものと考えられていますが、決定的な証拠は見つかりません。2人はこの謎に取り組むことを決めましたが、決定的な証拠は見つからず、最後の望みをかけて美術館に天使像を売った本人であるベシル・E・フランクワイラー夫人に会いに行きます。実は、この夫人はこのお話全体の語り手でもあります。夫人の家に着くころには、2人の持ってきた貯金は底をついていました。洗濯でねずみ色になったよれよれの服を着た2人を見たフランクワイラー夫人は、2人に取引を持ちかけ、ジェイミーとクロードはある秘密を手に入れます。

「あのスケッチは大金になるってあんたいったわね、だから、あんたはこの秘密をきつとよく守るでしょうね。クロードはまたべつの理由で守るでしょうね。クロードの理由は、たまたまわたしのと同じなのですよ。」「それはなに？」ジェイミーが聞きました。「それは、これが秘密だということだけのことよ。それでクロードはちがったひとになって、グリニッジに帰れるのよ。」クロードはジェイミーを見てうなずきました。わたしのいったことの何かが、通じたいのです。わたしはつづけました。「秘密を胸に持って帰るっていうのが、クロードの望みのよ。天使には秘密があったので、それがクロードを夢中にもさせたし、重要にもさせたのですよ。クロードは冒険が欲しいのではないわね。お風呂や快適なことが好きでは、冒険向きではありませんよ。クロードに必要な冒険は、秘密よ。秘密は安全だし、人をちがったものにするには大いに役立つのですよ。」

私は『クロードの秘密』の中でこの部分が一番好きです。

何年前か忘れてしまったのですが、これは、クリスマスに贈ってもらった本だと記憶しています。私はクロードに似ているような子どもだったし美術館も好きだったので、この本を読んで、計画を立てながらメトロポリタン美術館で暮らし隠れたりする家出の様子に憧れたことを今でも覚えています。今回、この本を読み返してみると、初めてこの本を読んでから10年余りで私にもたくさんの秘密が増えたことが分かりました。この2人がメトロポリタン美術館に家出したように、私も自分だけの冒険をしてきたんだと思え、これからは自分だけの冒険をどんどんして、自分だけの秘密を増やして、どんどん違っ

た自分になっていきたいと思わせてくれました。そんな『クロードの秘密』は、「自分に挑戦したくなる本」というテーマにぴったりの作品だと思います。（五十嵐彩夏）

